

微笑

芥川龍之介

青空文庫

僕が大学を卒業した年の夏、久米正雄くめまさをと一緒に上総いつしよの一ノ宮かづさの海岸に遊びに行つた。それは遊びに行つたといつても、本を読んだり、原稿を書いたりしてゐたには違ひないが、まあ一日の大部分は海にはひつたり、散歩したりして暮してゐた。

或暮方くれがた、僕等いちは一ノ宮みやの町へ散歩に行き、もう人の顔も見えない頃、ぶらぶら宿の方へ歸つて来た。道は宿へ辿り着くためには、弘法麦こうぼうむぎや防風ぼうふうの生えた砂山を一つ越えなければならぬ。丁度ちやうど、その砂山の上に来た時、久米くめは何か叫ぶが早いか一目散さんに砂山を駆け降りて行つた。僕はどうしたのだからなかつたが、兎とに角かく、何か駆けなければならぬ必要があるのだらうと

思つたから、矢張やはり、その後から駆け出すことにした。それは人目ひとめのない砂山の上に、たつた独り取残されるのは薄気味悪いといふことも手伝つてゐるのに違ひない。しかし、久米は何なんといつても中学の野球の選手などをしたことのある男である。僕はまだ一町と駆けないうちに、忽ち久米の姿を見失つてしまつた。

十分ばかり経たつた後のち、僕は息を切らしながら、当時僕等の借りてゐた、宿やどの離室はなれに歸つて来た。離室はたつた二間ふたましかない。だから見透みすかし同様なのだが、どこにも久米の姿は見えなかつた。しかし、下駄げたのぬいであるところを見ると、兎とに角かく、歸つて来てゐるのには違ひない。そこで僕は大きな声を出して、

「おい、久米。」

と呼んでみた。するとどこかで、

「何^なんだ。」

といふ返事があつた。けれどもどこにゐるんだか、矢張^{やはり}、見当はつかなかつた。

「おい、久米。」

僕はもう一度かう声をかけた。

「何^なんだよう。」

久米ももう一度返事をした。今度は久米のゐるところも大体僕にあきらかになつた。僕は縁側伝ひに後架^{こうか}の前^ゆに行き、

「何^なんだつてあんなに駆け出したんだ。」

と言つた。僕の声は疑ひもなく多少の怒りを含んでゐた。する

と久米も腹をたてたやうに、かう中から返事をした。

「だつて、駆け出さなくちやあ、間に合はないぢやないか。」

爾来、七八年の日月は河のやうに流れ去つた。僕はもう何時の間にか額の禿上るのを嘆じてゐる。久米も、今ではあの時のやうに駆け出す勇氣などはないに違ひない。（大正十四年）

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

微笑

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>